【実践型プロジェクト部門】

若い世代への伊勢崎銘仙の伝承

四ツ葉学園地域歴史研究会（伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校）

狩野　喜晴（５年）・野口　遥菜（５年）・砥上　結吏（５年）
針田　菜央（５年）・小林　香穂（４年）

私たち四ツ葉学園地域歴史研究会は、主に伊勢崎銘仙の文化の伝承を目的として昨年度から活動している。前回の絹ラボでは、「伊勢崎銘仙の新たなイメージ作り」をテーマに研修、パンフレットや小説の作成・配布、各イベントへの参加を行った。

今回の活動では、昨年度の活動を継続し、「若い世代への伊勢崎銘仙の伝承」というテーマを掲げた。研究を進めるにあたり、銘仙文化や織物文化の残る地域への研修や、情報発信のためのイベントへの参加を行った。その上で、アンケート調査の実施によって伊勢崎の現状把握を図った。

今年度の活動のテーマである「若い世代への伊勢崎銘仙の伝承」を図るための主な活動としては、伊勢崎銘仙に関係する施設を紹介した絵本を作成し、駅前で放映したことを挙げる。また、情報社会で効果的に発信できるようWebサイトを作成して伊勢崎銘仙の情報発信に努めた。

このような私たちの活動は、伊勢崎銘仙の伝承に寄与することができたと考える。以上の活動の広告のため、駅前や他校で報告の機会を設けた。以下は私たちの活動の詳細である。

目　次

第１章　研究目的
第２章　昨年度までの研究の概要
第３章　銘仙文化や伊勢崎銘仙をはじめとした地域の歴史への理解を深めるための学習
　第１節　八王子・足利への研修
　　１．八王子研修
　　２．足利研修
　第２節　伊勢崎銘仙着付け体験イベントへの参加
　第３節　いせさき明治館への取材
第４章　伊勢崎銘仙を通した伊勢崎の文化都市としての魅力を伝えるための私たちの活動
　第１節　はいからさんの銘仙あそびへの参加
　第２節　伊勢崎駅前インフォメーションセンターにおけるパネル展示
　第３節　伊勢崎銘仙に関する絵本映像の制作
　第４節　伊勢崎のまちなかを紹介するWebサイトの制作
　第５節　iTanQ”Ｘ”への参加
第５章　私たちの活動の成果と課題

第１章　研究目的

四ツ葉学園地域歴史研究会は、若い世代への銘仙文化の継承を主な目的として活動している生徒の集まりである。伊勢崎は、銘仙の優れたデザインや実用性のために大いに繁栄した歴史がある。我々は、若い世代に銘仙文化の継承をすることは、伊勢崎の再興につながると確信している。昨年度、私たちは、銘仙文化を

主題とした伊勢崎のパンフレット及び田島弥平の生涯をテーマとした小説を作成した。しかし、発表会で指摘されたよう、紙媒体のパンフレット及び小説は、インターネットが普及している現代において、地域に広く普及させることが難しいという問題を孕んでいる。そこで、今年度の絹ラボでは、学生の一人一台端末が主流化しているという現状を鑑みて、誰もが簡単に見られるサイトを作成し、伊勢崎銘仙を中心とした伊勢崎のまちなかを紹介しようと考えた。そうすることで、より多くの若い世代への銘仙文化の伝承を図り、前年度よりも優れた結果を得られるはずである。

第２章　昨年度までの研究の概要

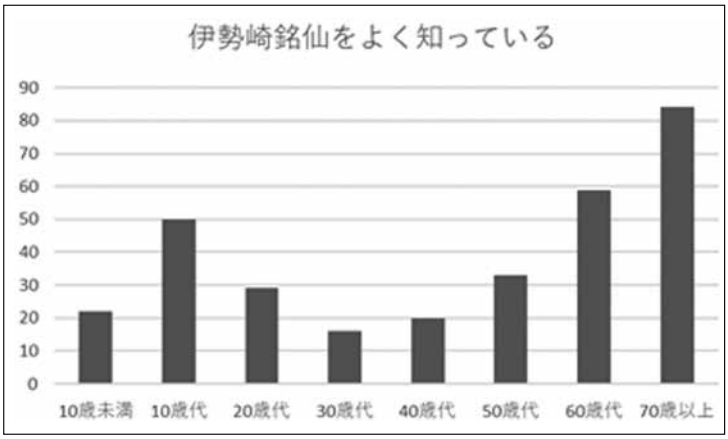

図１　伊勢崎銘仙の認知度　（単位：％）

本年度の研究成果を論述する前に、これまでの研究の成果と課題をまとめる。

伊勢崎市は絹にまつわる深い歴史がある。しかし、「世界文化遺産・田島弥平旧宅のあるまち」、「伝統的工芸品・伊勢崎絣のあるまち」であるにもかかわらず、私たちのアンケート調査結果（対象：市民129人・県民18人）によると、これらが若者を中心に知られていない（図１）現状に危機感を抱いた。しかし、地域の歴史について学びたいとコメントする市民も数多くいた。ここから、子どもやその家族を対象とした銘仙文化に関する学習の場や歴史を身近に感じられる遺産に触れる機会を十分に設けることで、銘仙への理解度も容易に向上させることができるだろう。つまるところ、地域の学習環境を整えることが、地域の活性化に直接的に肯定的な影響をもたらすと推定する。

また、私たち自身が地域や絹産業への学習を行うことで、より正確且つ有効な銘仙の歴史の伝承活動が行えると考えた。研修地はいせさき明治館、境島村（田島弥平旧宅、田島武平旧宅）、富岡製糸場、群馬県立世界遺産センター「セカイト」、伊勢崎織物会館、群馬県立歴史博物館、伊勢崎市立赤堀歴史民俗資料館、ちちぶ銘仙館など多岐に渡った。その研究の進行を、伊勢崎駅前で月に１回開催されるいせさき楽市（伊勢崎市、伊勢崎商工会議所、群馬伊勢崎商工会、まきばプロジェクト主催）で逐一発表した。また、３月には伊勢崎銘仙の日に合わせて「いせさき銘仙の日」記念イベント実行委員会の主催の元開催された「はいからさんの銘仙あそび」にて絹ラボ成果報告会と同様の研究報告を行った。こうした発表の折に、私製のパンフレットを260部近く配布したことに加え、市内の小学校などの施設に独自の小説を配架した。これらの活動を通して、私たちの活動や制作物を多くの人に広めることができたと言えるだろう。昨年度の絹ラボ成果報告会では、審査委員より高校生らしいアクティブな取り組みが称賛された一方、紙媒体はネット社会の現代において若者に普及しにくい点、テーマが広く軸がぶれている点などを指摘された。そのため、今年度は伊勢崎の絹文化の中でも「伊勢崎銘仙」に焦点を当て、インターネットも活用したより効果的な普及活動を行うこととした。

第３章　銘仙文化や伊勢崎銘仙をはじめとした地域の歴史への理解を深めるための学習

今年度も、銘仙文化や地域の歴史の学習を行った。全ての研修をメンバー全員で行うことはかなわなかったが、手分けをしながら知見を広げた。昨年度の研究で桐生と秩父にて研修を行ったため、本年度では伊勢

崎を含む銘仙五大生産地の残り二地点である八王子と足利にて研修を行うこととした。その他、伊勢崎銘仙に関する深い知識を得るため、銘仙着付け体験への参加といせさき明治館への取材を決行し、地域に密着した学習に取り組んだ。

第１節　八王子・足利への研修

１．八王子研修

８月には八王子市の絹の道資料館と桑都日本遺産センター八王子博物館「はちはく」にて研修を行った。まず、八王子市・絹の道資料館で学んだことは、主に養蚕形態の変遷や八王子銘仙の概要である。八王子は江戸時代中期から「桑都」として知られ、19世紀に入るころには定期的な織物市である縞市が開かれていた。しかし生糸の需要を国内で補うことが難しく、江戸時代まで中国などの諸外国からの低品質の生糸を多く輸入していたため、幕府が農業の合間の養蚕を奨励した。それにより、江戸時代後期頃に機械が発達した利を得て、生糸の量産に成功した。幕末期には高機などの普及によって織物技術が著しく発展し、着物のブランド価値も高まった。この出来事は養蚕・製糸と機織りの生産地を分けることに繋がり、そして横浜開港以降、海外へ盛んに輸出されていった。

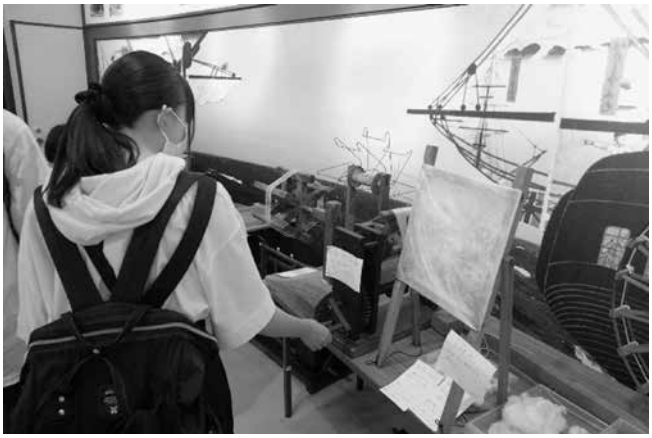

図２　「はちはく」の座繰り機展示の様子

同じく八王子にある桑都日本遺産センター八王子博物館「はちはく」では、展示を観覧し八王子銘仙への理解を深めた。研修日に開かれたワークショップ「養蚕農家さんのお話を聞こう！」に参加し、東京都唯一の養蚕農家である長田誠一氏より養蚕の作業の説明や飼育における工夫点、苦労などをご教授いただいた。担い手不足が深刻化する中で、氏の一家が積極的に養蚕技術の伝承を図っていることを知った。養蚕の現場に立つ人の話を聞いたからこそ、銘仙の歴史的価値の高さや伝承の難しさを克明に感じられた。

２．足利研修

９月に足利市の足利織物伝承館にて研修を行った。

私たちは、銘仙についての研修のため、織物産業で有名な足利市に位置する足利織物伝承館を訪れた。

足利織物は歴史が古く、奈良時代の始め頃に足利地方から「ふとぎぬ」が中央政府へ献上されたという記録がある。正倉院の文書や兼好法師の著した『徒然草』にも足利織物に関する記述があり、古代から中世の時点で既に有名な織物であったことが窺える。

貨幣経済が発達した江戸時代では、主に綿製の足利織物が「足利織」「足利織物」などという呼称で人気を博した。この時期には、主な使用者が貴族から一般大衆に移り変わ

図３　足利織物伝承館の展示

り、人口に膾炙した。明治時代にも綿の足利織物の生産は続けられていたものの、明治20年代前後の不景気の際には絹織物の生産が活発となった。足利織物講習所、両毛鉄道、足利銀行などが相次いで設立したことで技術者の育成施設、物流の拠点、経済基盤がそれぞれ確立した。これらを大いに活用し、生産方法の改良や新機械の導入を行い、質の良い織物を全国各地へ遍く発信した。それと並行して海外への市場開拓のため、直接輸出体制を確立させ、その規模を拡大させた。昭和になると、足利織物のデザインが評価され「足利銘仙」として生産額が増加し、模様銘仙が飛躍的な発展を遂げた。戦後、その人気も下火になったものの、現在ではメリヤスの技術を活かしたニット製品等の生産や行事用の着物の生産、染色を主産業として伝統技術を継承している。

今回訪れた足利織物伝承館は、「絹のみち広域連携プロジェクト」を進めている。「絹のみち広域連携プロジェクト」は、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録を契機に、世間の絹への関心が高まりつつある現在、各産地で絹産業を支える関係者が観光サービスの開発に積極的に取り組む事業である。同プロジェクトではインバウンド観光客も集客ターゲットに見据え、絹産業を最大限に活用した地域経済活性化を図っている。足利市では、足利銘仙という資源を活用した産業や観光事業を行っているのだ。以下、銘仙を観光資源として活用する取り組みの一例を紹介する。

足利織物伝承館の入り口には足利銘仙を紹介したり、現在における足利の繊維業についても触れていたりする動画が放映されている。館内では、銘仙を用いた洋服やバッグ類、小物など足利の企業が取り扱う繊維製品の充実した販売を行っている。同館は手染め体験を始めとして、夏休み期間を中心に体験イベントが充実している。

また、足利織物伝承館にて配布されていた観光マップにも工夫がある。クリアファイルの中に地図が挟み込まれているのだが、クリアファイルと地図を重ねることで観光情報がふんだんに盛り込まれた観光マップが浮かび上がる。マップには地元の人々おすすめのお店や歴史スポットがまとめられており、クリアファイルの種類も豊富である。クリアファイルをデザインすることで、自分オリジナルのマップを作ることができるのも大きな魅力である。

これらの研修から、銘仙の歴史についての理解をさらに深めることができた。加えて、長田氏のワークショップや足利の観光マップから、実際に養蚕業や織物業に関わっている方の話を聞くことや地域住民から地域の魅力を発信することが、過去の文化を現代でも魅力あるものに昇華させるために大切なことだと学んだ。

第２節　伊勢崎銘仙着付け体験イベントへの参加

図４　着物姿でまちなかの店を巡る様子

私たちは「両毛線沿線のほほん秋いろさがし　特別体験プログラム【銘仙着付け体験】」に参加し、伊勢崎のまちなかを着物で巡る観光を体験した。このプログラムは、参加者がいせさき明治館に収蔵されている伊勢崎銘仙を着用し、まちなかの飲食店を楽しむという内容であり、いせさき燈花会も同日開催されていたことも相まって、伊勢崎が着物の似合う町としての側面を持つことを実感できた。着物がほとんど生産されなくなった現代において、着付けをする文化や着物で催物を体験することは貴重であり、文化が廃れることを防ぐために、人目に触れる機会を効果的に創出しなければいけないと感じた。着物姿を着ることで、日常風景の中に非日常を見出すことができ、伊勢崎の魅力や伊勢崎銘仙の魅力を

より引き出すことに繋がったと考えられる。しかし、今回着用した着物の中で、男性用のものは現存する量が極端に少ないといい、着物を着る事業で地域の活性化を図ることの難しさに直面した。また、参加者は概ね30代以下の若い世代であったことからも、伊勢崎銘仙のデザインや着物は、知ると知らざるとに拘わらず人々を惹きつけるコンテンツであることが容易に推察できた。このプログラム内で撮影した写真は制作したサイトに活用した。

第３節　いせさき明治館への取材

昨年度は文献調査や客観的史実の伝承にとどまっていたが、今年度は史実に加え銘仙に深く関わる人々の声の伝承も図った。いせさき明治館で展示解説を行っている伊勢崎観光物産協会の小澤洋一氏に協力を仰ぎ、伊勢崎銘仙の魅力や若者に願うことは何かを尋ねた。このような声をサイトに掲載することで、微力ながらも銘仙文化の継承に貢献できるのではないかと考えた。

最初の質問は伊勢崎銘仙の歴史だ。かつて銘仙が太織と呼ばれていた時代から現代にいたるまで、日本中で伊勢崎の織物が高い評価を得ていた。氏の解説は、伊勢崎の織物産業の普及する背景を幕府の政治などの史実に求めたものであった。一例として、伊勢崎太織が遠方でも使われるようになったきっかけとして、徳川吉宗の倹約令を挙げ、安価な太織が大阪で人気を博したと述べている。小澤氏は家業である染物屋を長年間近で見てきた。そのため、氏は祖父母世代から親世代にかけての、伊勢崎織物の盛大と不況の様に詳しく、産業に関わる人間が歴史の転換をどのように見ていたのかを知ることができた。分業制で織物を生産していた当時、それぞれの工程に多くの生産者が従事し、すべての工程を束ねる機屋がいた。伊勢崎銘仙の売れ行きは好調で氏の祖父母世代には大変繁盛した。しかし、親世代になって伊勢崎銘仙の売れ行きが悪化すると機屋が倒産した。親会社である機屋が倒産すれば染屋も店を閉めざるを得なくなった。その後は、元々の染屋は銘仙事業から撤退し、伊勢崎の基幹産業は他種の織物生産に移行していったという。この出来事は既に半世紀以上前に起こったことであり、知る者も少なくなってきている。私たち若者が伊勢崎について学ぶ上で、伊勢崎銘仙の栄枯盛衰に関する当事者の思いを理解することは避けて通れない。そのため、口述記憶の歴史をまとめたWebサイトの様な媒体は、重要な存在意義を有するものだと確信する。

また、小澤氏がメンバーの一員を務める「21世紀銘仙プロジェクト」についても質問した。21世紀銘仙プロジェクトとは、伊勢崎銘仙の生産が止まってから何十年という月日がたった現代で、伊勢崎織物特有の「併用絣」を使用した伊勢崎銘仙の復活を目指したプロジェクトだ。資料には掲載されない、長期的な努力や苦労、そしてメンバーが共有した達成感を追体験することができた。

小澤氏は郷土かるたの上毛かるたにも詠まれる伊勢崎銘仙は知名度こそあっても、実態をほとんど知らない人が多いと指摘する。そして、「かつて伊勢崎が日本をリードする銘仙文化だったことを多くの人に知ってほしい。そして、そして何よりも実際に実物を見にいせさき明治館に訪れてほしい。」と語った。

銘仙が大衆着として今とは比べられないほど多くの人に親しまれたことや、伊勢崎がその日本一の生産地だったと学習することも重要な経験であることを前提として、現地へ訪れて学習することの大切さを以下のように述べる。

伊勢崎に実際に訪れてもらえれば、銘仙の美しさや技術の高さを感じ、銘仙がたくさんの魅力に溢れていることや、伊勢崎銘仙が日本中で人気を博した裏に、多くの伊勢崎の方の努力があったこともより深く、具体的なイメージをもって感じてもらえるは

図５　小澤氏との記念撮影

ずである。
更に、いせさき明治館で解説をしている立場として銘仙文化の伝承についても語る。氏は若者に銘仙文化を伝承することはとても重要だと考えているが、その実現が難しい現状を憂慮しているという。数ある課題のうち、一点目は、伊勢崎銘仙が生産されていない以上、語り継ぐことでしか銘仙文化の伝承を行うことはできない点、二点目は、興味関心を持っていせさき明治館に訪れる一般の方は数少ない点、最後に、伊勢崎銘仙について知見のある人も数えるほどしかいなく、高齢化が進んでいる点だ。氏は、若い人が銘仙の知識をインプットができなくなってしまう状況になる前に、伊勢崎銘仙について若者の方には特に知ってもらい、一人でも多くの人に銘仙文化を残したいと思ってほしいと願っている。若者への銘仙の浸透が著しく不足しているという認識は、昨年度私たちが取ったアンケート結果と一致していた。また、上毛かるたや小学校の郷土学習で「伊勢崎銘仙」の名前や存在は知っても実際に足を運んでもらえていない現状を痛感した。更に、銘仙文化を次世代に伝える担い手不足も喫緊の課題だと強く感じた。こうした状況を踏まえ、私たちは伊勢崎銘仙に関する情報発信と共に、実際に足を運んでもらえるような仕掛けが必要だと考え、活動の主軸とすることにした。

第４章　伊勢崎銘仙を通した伊勢崎の文化都市としての魅力を伝えるための私たちの活動

第１節　はいからさんの銘仙あそびへの参加

私たちは、令和４年度３月に伊勢崎市の赤石楽舎にて、伊勢崎銘仙に関する私たちの活動を発表したり、昨年度研究会で作成した田島弥平の生涯に関する小説を朗読したりした。銘仙に造詣の深い方々や、伊勢崎市内を拠点とする企業・店舗の皆さまが会場を訪れ、私たちの活動をより多くの人に知ってもらうことができた。私たち自身も、伊勢崎銘仙に関する他の方々の発表や講演を聞き、聴衆の方々との交流をしたことで、伊勢崎銘仙に関する知識をより深めることができ、良い経験となった。会場では、私たちの活動を紹介する展示も行い、昨年度製作したパンフレットや小説を配布することもできた。

第２節　伊勢崎駅前インフォメーションセンターにおけるパネル展示

令和４年度並びに令和５年度の私たちの活動をより多くの方々に知ってもらうために、伊勢崎駅前のインフォメーションセンターにおいて、図６のようなパネル展示を行った。研究会の紹介パネルや、メンバーが伊勢崎銘仙を着て巡った伊勢崎市の名所の写真を展示し、来場者へのアンケート調査も行った。12月10日から12月23日まで展示を行い、期間中には294名に足をお運びいただいた。伊勢崎市長も展示をご覧になり、その様子は市長のブログにて紹介された。展示期間中には、赤石楽舎で配布したものと同様のパンフレット

図６　展示風景

パネルで街の魅力紹介　四ツ葉等中

伊勢崎

伊勢崎市のまちなかの魅力を若い世代に伝えようと、伊勢崎四ツ葉学園中等教育学校の生徒が企画したパネル展が23日まで、同市の伊勢崎駅前インフォメーションセンターで開かれている＝写真。

伊勢崎銘仙を着た生徒が、いせさき明治館や旧時報鐘楼などを訪ね歩く＝との設定の写真に説明文を添え、魅力を伝える内容。同校の地域歴史研究会が、散策マップも含めてパネル10枚にまとめた。

研究会代表の狩野喜晴さん（5年）は「色鮮やかな伊勢崎銘仙の美しさを感じてもらうとともに、銘仙が似合うまち伊勢崎の歴史資産を知ってほしい」と来場を呼びかける。

午前9時～午後5時。月曜休館。過去に開かれた銘仙ファッションショーの写真も展示した。（小沢宜信）

図７　パネル展に関する上毛新聞社の記事

も配布した。また、本研究会私製の伊勢崎銘仙に関する絵本の映像を流したが、このことについては次の項目で詳しく紹介する。

また、展示に即してアンケートも実施した。アンケートでは「出身地」「在住地」「年齢」に加え、「今回の展示はわかりやすかったか」「映像を見て伊勢崎を散策したいと思ったか」「今回の展示を見て伊勢崎の魅力をさらに知ることができたか」「伊勢崎銘仙のイメージが向上したか」「その他コメント」の項目を設けた。概ね好評をいただくことができたが、中には「手作り感が出てなく、親近感が沸かなかった」「あまりにも普通であり、改めてイベントとする意義が感じられなかった」などのコメントも散見された。他にも、伊勢崎銘仙についての知識不足を指摘されたこともあり、更なる深い学び、そして伊勢崎で銘仙に関わる人々の願いを丁寧に伝えることが必要だと気付かされた機会にもなった。図８は来場者数だ。今回の展示は本研究会のインスタグラムで宣伝をした。若い世代へ銘仙文化を浸透させることを目的とした今回の展示において、効果的な宣伝だと考えたためである。また、図７の2023年12月12日付の上毛新聞にて展示内容を取り上げられたことも宣伝活動の一端を担ったことだろう。

日付	曜日	合計
12月10日	日	35
12月11日	月	休館日
12月12日	火	16
12月13日	水	19
12月14日	木	20
12月15日	金	17
12月16日	土	71
12月17日	日	37
12月18日	月	休館日
12月19日	火	11
12月20日	水	20
12月21日	木	18
12月22日	金	11
12月23日	土	19
合計来場者数（人）		294
1日平均来場者数（人）		24.5

図８　本展示の来場者数

第３節　伊勢崎銘仙に関する絵本映像の制作

今回のテーマである「若い世代への伊勢崎銘仙の伝承」を実現するため、特に小学生に向けたわかりやすい内容の絵本映像を作成した。小学校では朝の読み聞かせの時間があることから、そのような時間に映像を活用することを想定している。絵本の内容は、市内に住む子どもたちが、伊勢崎銘仙に関する場所（伊勢崎駅、いせさき明治館、伊勢崎神社）を訪れ、クラスメイトに調べた結果を発表するという内容である。絵本のイラストは本校の美術部員が担当した。内容とイラストが完成したあとは、研究会メンバーでアフレコや編集を行った。今年度はその動画をインフォメーションセンターにて放映した。また、この映像は、伊勢崎市図書館にて動画の永久保存、配架貸し出し、学校連携事業への活用が決定した。学校連携事業とは小中学校の授業などで必要な参考資料を図書館がまとめ、学校に提供するものだ。学校連携事業の資料にもなることで、小学生などの地域学習などの場において、制作した動画が活用され、伊勢崎銘仙をはじめとする地域の歴史への親しみを感じてもらえるはずだ。多くの小学生に伊勢崎市の名所を知ってもらい、地域の歴史への関心を高めてもらうことが目的だったが、それに加えて私たち自身も伊勢崎市の名所をより深く知るきっかけとなった。

第４節　伊勢崎のまちなかを紹介するWebサイトの制作

昨年度は伊勢崎のまちなかを紹介するパンフレットを制作したが、予算の都合上、発行部数に限りがあること、若者にとっては紙媒体より電子媒体のほうが馴染み深いことを踏まえ、今年度はWebサイトを制作することにした。学生の郷土学習や観光に活用されることを目的としている。構成は、伊勢崎銘仙を着用して撮影した写真を使用した歴史資産を紹介するページ、紹介した歴史資産の詳細を個別に解説するサブページ、歴史資産を巡る際におすすめの飲食店を紹介するページ、いせさき明治館の職員の方への取材をＱ＆Ａ形式でまとめたページ、から構成される。伊勢崎駅をスタート地点とし、７箇所の歴史資産を巡る観光コースを提案した。写真のサイズを画面いっぱいに映し、視覚に訴えた。また、サブページに歴史資産の解説を掲載することで、教育の現場でも活用しやすい内容とした。現在、サイトの公開はしたが、より多くの市民が見る機会を増やすための工夫を検討している。現時点では、図書館の学

図９　制作したWebサイトのQRコード

校連携事業に活用される予定のCDのケースカバーにWebサイトのQRコードを同封すること等を検討している。図９は、制作したサイトにアクセスできるQRコードだ。

第５節　iTanQ“Ｘ”への参加

私たちは令和５年12月23日に群馬県立伊勢崎高等学校で開催された、「iTanQ“Ｘ”」にて、昨年度の研究も含めた今まで行ってきた活動の発表をした。「iTanQ“Ｘ”」とは、県内外の高校生が取り組んだ探究活動を発表し合う午前の部と、東京大学大学院名誉教授の上野千鶴子さんをゲストとした基調講演やパネルディスカッションなどのワークショップを行う午後の部の二部構成となる高校生と日本の未来について語り合うことを目的としたイベントだ。

午前の部にて私たち地域歴史研究会の発表に対して、聴衆の方から「様々な調査と活動があり、テーマとポイントが明確であった」「伊勢崎銘仙を知らなかったので、実際に見て、触ってみたくなった」「スケールが大きい探究で、小説まで書いて、小中学校、図書館に寄贈等の活動に感銘を受けた」と、伊勢崎銘仙を知らない人が魅力的に感じたことや、活動理念が広く伝わったことに手ごたえを感じた。その一方で、「若い世代は、伊勢崎銘仙との関わりが少ないということはあくまでも主観的で、調査の根拠に基づいていないだろう」「伊勢崎銘仙をよく知っている人はなぜ知ったのか、どうやって知ったのかを調査し、伊勢崎銘仙を知らない人々への発信方法の参考にするべきだ。」という厳しい意見もあり、今後の活動の指針としたいと感じた。

また、東京大学大学院名誉教授である上野千鶴子氏からは、とても地元愛が強い探究であると称されると同時に、この探究を行う地域歴史研究会を予算面、人員面で今後どのように継続していくかという課題を提起された。

午後の部のパネルディスカッションには、地域歴史研究会から１名が参加し、日本の未来について、上野千鶴子氏や他団体の高校生とともに語り合った。このパネルディスカッションでは、地元愛が大きな論題の一つとなったので、伊勢崎銘仙についてどうやったら地元の人達により愛着を持ってもらえるのかを深く考えることができた。

「iTanQ“Ｘ”」を通して、伊勢崎銘仙について伊勢崎銘仙を知らない人たちに存在を周知すること、伊勢崎銘仙をこれからより盛り上げていくための意見を得ること、の２つを成すことができた。

第５章　私たちの活動の成果と課題

私たちは、２年間に及ぶ絹ラボでの活動を通して、歴史の伝承と地域活性化を行った。伊勢崎銘仙をはじめとした地域の歴史のために訪れた文化施設は計12箇所に及ぶ。また、パンフレット、小説、絵本映像の伊勢崎市図書館での永久保存、配架貸出、そして諸活動において学校間連携が実現した。加えて、伊勢崎銘仙をはじめとした地域の歴史に関連する文化施設をまとめたWebサイトを作成し誰でも伊勢崎銘仙をはじめとした伊勢崎の歴史を閲覧できるようにした。洋装化に伴い、伊勢崎銘仙が日常で着られることがなくなってしまった現代で、歴史を伝承するには若者に向けて情報を発信することがとても大切だ。それは、第２章のアンケート結果のグラフから10歳未満、30歳代から40歳代の人々に伊勢崎銘仙がよく知られていないことが読み取れることだ。今年度新たに制作した絵本映像とWebサイトは、伊勢崎銘仙をはじめとした伊勢崎の歴史を知るきっかけになることはもちろん、伊勢崎銘仙を若者にとっての新たな娯楽にする、ゆくゆくは文化継承の担い手となるきっかけを与えることも期待できると強く信じている。

謝辞

本プロジェクトを進めるにあたり、

・いせさき銘仙の会　代表世話人　杉原みちこ様
・いせさき明治館　小澤　洋一様
・上毛新聞社　編集局伊勢崎支局長　小沢　宜信様
・伊勢崎市教育委員会　図書館課　市史編さん係長　勢藤　　力様
・群馬県立伊勢崎高等学校　教員　野口　裕之様
・東京大学名誉教授　上野千鶴子様
・伊勢崎市　産業経済部　文化観光課の皆様
・伊勢崎市　都市計画部中心市街地整備事務所　都市開発課の皆様

には、温かい御助言・御指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

　また、急な訪問であったにもかかわらず、丁寧に対応してくださった、

・絹の道資料館（訪問日：８月20日）
・桑都日本遺産センター八王子博物館「はちはく」（訪問日：８月20日）
・足利織物伝承館（訪問日：９月２日）
・いせさき明治館（訪問日：１月14日など複数）

の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

〇参考文献

・伊勢崎市教育委員会　『伊勢崎織物ハンドブック』（伊勢崎市教育委員会・2010年）
・足利織物伝承館（閲覧日：１月29日）
https://orimono-densyokan.com/